
やってきた場所はFateの世界！？

マキサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やってきた場所はFateの世界!?

【Nコード】

N88390

【作者名】

マキサ

【あらすじ】

主人公 如月 雅人がトラックにはねられそうな少女を助け、意識を失う。

そして気づいた先はFateの世界!?!そして聖杯戦争に介入!?!
そんでもって自身のサーヴァントはセイバ オルタツ!?!
原作キャラと自身のサーヴァントとともに聖杯戦争を勝ち抜け!?!
そして聖杯を手に入れるツ!

(注) キャラ崩壊があります。その言つのがお好きな方は読んでください。

プロローグ(前書き)

Fateを始めました。読んでください。

プロローグ

東京

「はあ、今日のバイトはこれでおしまいっど。」

コンビニから一人の青年がでてくる。彼の名は如月 雅人。

「さてと、帰ったら何しよう」

雅人は考えていると…

「およ…?」

とある映像に注目。それは…

『約束されし勝利の剣ツエクスカリバー!!!』

『全投影、連続掃射!』』

Fate/stay nightだった。

「映画の宣伝か?フフ。今度、見に行こう」

雅人は歩き続けるとふと、こんな考えが頭に浮かぶ。

「(Fate/stay night。土郎や、セイバー、凜などのキャラクターが存在する世界に行けたらな…)」

雅人は思うと…

ブウンッ!!!

「キヤアアッ!」

「!!!」

女の子の叫び声がして、振り向くと、道路でトラックが女の子に突っ込んできた。

「なっ!?!くっ!?!間に合うか!?!」

雅人はその場に近いので急いで女の子の方へと向かう…が…

ブブウンッ!!!

トラックが眼前にいた。

「くっ!?!」

雅人は女の子の背中を押す。どっちらトラックにはねられることはなくなつたようだ。だ…

ガシヤアアツツ!!

トラックが雅人をはねた

「(あ…俺…死んだな…)」

そう思いながら、雅人は意識を失った。

「ん…ん…あれ？」

ふと、雅人は眼を開け、体を起こす。

「あれれ？トラックにはねられたはずなのに、傷が見当たらないな。それに…」

雅人はあたりを見渡す。

「さっきは昼間だったぞ。何で夜になっているんだ!？」

そう、雅人は女の子を助けたその時は昼間。だが、辺りはすっかり夜になっていた。

「それに…」

雅人はまた辺りを見渡す。そして出た言葉は…

「ここはどこだ…?」

第一話

「此処、何処だ!？」

雅人はあたりを見渡しながらそう言う。

「ホントどうなってんだよ!？いつの間にか夜になっているし、辺りだって道路だったのに…住宅がいっぱいだし…もうわけわかんねえツ!！」

雅人は頭を抱えながらそう言う。

「それに俺は死んだはずだぞ!？でも、体はなんともないし…どうなっているんだ?マジでわけわかんねえ。とにかく、歩いていれば…なんとかなるだろう。」

雅人は言いながら歩くと…

ガキイツツ!!

何か金属がぶつかり合う音が響いた。

「なんだ!？な、何か嫌な予感するなあ…。」

雅人は言いながら音がした方に走る。すると…

バツ！

何かが屋根を飛び移っていた。

「誰だ？」

雅人はよく見るが、暗くてよく見えない。

「明かりがあればなあ。」

そう思っていると、雲で見えなかった月が姿を現し、辺りを照らす。そして、先ほど屋根を飛び移ったものの姿がみえる。それは…全身を蒼いタイツに身を包み、手に赤い槍を持った男だった。それを見た雅人は…

「ラ…ランサアアアツ!？」

驚き、思わず大声で叫んだ。

「ああ？」

それに気付いたランサーと呼ばれる男は雅紀の方に顔を向ける。

「っ…!!」

雅人はランサーに見られたからか、ビクツと震える。そしてランサーが目の前に降り立つ。

「てめえ、何者だ？俺をランサーと言ったのなら、マスターか？」

ランサーにそう言われるも、雅人は無言でいた。いや、言葉を発せられないでいる。目の前にランサーが実際にいることへの驚きと、ランサーから発する殺気で動けないでいたのだ。

「見た所、サーヴァントはいねえし。まだ召喚すらしてねえのか？ 魔力は…っ！ほう、こいつは凄えぜ…てめえから凄い魔力を感じる。」

「へ…？俺に魔力が…！？」

「なんだ…知らねえのか？フン、まあいいさ。」

言いながらランサーは構える。

「こつちとら、セイバーとやり合ったところだが、人間なら殺せるなあ。自信に魔力がある事を知らないとなるとてめえは魔術師でもねえしマスターでもねえ。正体を知られたら消すのが、この「聖杯戦争」のルールでなあ。」

死んでもらうぜ？」

ランサーが言った瞬間、

「うあっ！」

雅人の右肩に切り傷ができる。しかも…

「チッ！手元が狂っちゃった。」

先ほど、少し離れていたランサーが雅人のすぐ目の前にいたのだ。

「なっ！？（おいおい、まじで本物！？）」

雅人は恐怖する。

「運がいいなあ。だが、二度目はねえゼッ！！！！」

ランサーが手に持つ槍で雅人を刺そうとする。

「うわああっ！！！」

雅人はギリギリで避ける。

「おらおらあっ！！！！！」

ランサーが何度も槍で突いてくる。

「うわあああああっ！！！」

雅人はそれを避けながら逃げ回る。だが…

「フンッ！」

ドッ！

ランサーが一気に雅人と距離を詰め、腹に蹴りを食らわす。

「うわああっ！！！」

雅人は吹っ飛ばされ、壁に衝突。

「フンッ、ちょこまかと逃げやがって。だが…！」

ランサーは構える。

「最速のサーヴァントである、この俺からは逃げられねえ。諦めな。」

「くっ！（なんだよ、なんだってんだよ！もうわけわかんねえ…俺、また死んじまうのかよ…！！）」

雅人は目に涙を浮かべながら思う。

「さてと、あの世に楽に逝かせてやるよ。じゃあな。」

ランサーは槍を持つ手に力を込める。

「（誰か、助けてくれええエエツっ！！！！！！）」

雅人は心の中で叫んだ。その時、辺りが赤く輝きだした。

「なっ！？これは…召喚の光…！！」

「え…ええっ！？」

雅人は驚いていると、足元に陣が現る。

ランサー「くっっ！」

ランサーは警戒し、雅人から離れる。そして…

「ぐうっ！」

雅人は左手に痛みが走り、見てみると、何か紋章が浮かび上がってきた。そうしている間に陣から発する光が強くなり、陣から、何か影が浮かんでくる。そして…

「フンツ！！！」

陣から何かがでてきて…

「うおッ！！？」

ランサーを吹っ飛ばす。そして、それは雅人の前に立つ。それは、いや、少女は無言のまま、金色の瞳で雅人を見る。対する雅人は言葉を口に発せられないでいた。少女のその美しさに見惚れていたからだ。

「サーヴァント、「セイバー」。召喚に応じ、参上した。」

そう少女は呟く。

「問おう…お前が…私のマスターか？」

少女は言った。茫然としている雅人は…

「セイバー……オルタ……！？」

そう口にしたのだった。

第二話

雅人の目の前に現れた少女、それは…セイバーオルタだった。

「セイバーオルタ…」

雅人は茫然とセイバーオルタを見ていた。対するセイバーオルタは無言のままだった。

「てめえ…！」

「ん？」

セイバーオルタはランサーの存在に気付く。

「おい、てめえはあの小僧のサーヴァントじゃあ、なかったのかよ？」

「あの小僧？誰のことだ？」

「フンツ！まあ、先ほどのセイバーとは違うものを感じるから全くの別人か。じゃあ、てめえはイレギュラーってことで、いいのか…？」

「フンツ…：どうかな。お前を消せば、私は正式なサーヴァントだ…！」

そう言い、セイバーオルタは構える。

「ぬかせえっ!!」

ランサーはセイバーオルタに接近し、槍で貫こうとする。

「フン。。。」

対するセイバーオルタは余裕の表情で手に持っている不可視の剣で防ぐ。

「くっ!フンッ!」

ランサーは何度も槍で突きをやるが、全てセイバーオルタに防がれてしまう。

「なんだ。大したことがないな。そんなんで、よく英雄になったもんだな。」

「っ!ふざけやがってエエエッ!」

その言葉にランサーは怒り、怒涛の連打を食らわす。

「す...すげえ...」

その間、雅人は茫然と見ていた。生のサーヴァントとサーヴァントが戦う場面。ソレを見て、興奮が増す。

「フンッ!フンッ!」

ランサーは連打を食らわす。だが、その表情に焦りが見える。

「フン…もう、よかるう。次は私の番だ。」

セイバーオルタが呟いて瞬間…

ドッ…!

という音が響く。

「がはあ…!」

ランサーは吹っ飛ばされる。どうやら先ほどの音はランサーを吹っ飛ばした音のようだ。

「チイツ!」

とランサーは腹を抑えながら体制を立て直す。対するセイバーオルタは拳を前に出した状態にいる。

「(くそ!最速のサーヴァントであるこの俺が…拳一発だけで吹っ飛ばされると…!?!…仕方がねえ…)」

ランサーは何やら決意し、構えると…槍が怪しく光る。

「ん?」

セイバーオルタは何やら勘づいたようだ。

「中々の強さだな。一日に二度も宝具を使うことになるなんてなあ…!」

ランサーは言いながら、槍に魔力を込める。槍の輝きが増す。そして…

ランサー「その心臓、もらい受けるっっ！！！」

とランサーが一気に接近し、セイバーオルタを貫こうとする。セイバーオルタは無言でそれを避ける。だが、ランサーの狙いはコレだった。

「刺し穿つ死刺の槍ゲイホルク！！！」

ランサーが叫んだ瞬間、槍が方向を変えてセイバーオルタを貫いた。

「っ！！！」

セイバーオルタは吹っ飛ばされ地面に衝突。

「セイバーオルタ…！！！」

すると…

「心配無用だ。」

平然な表情をして立っていた。胸の鎧には小さいヒビが入っていた。

「ほう…我が必殺の刺し穿つ死刺ゲイホルクの槍を間一髪、避けたか…！」

ランサーは汗を出流しながら言う。

「フン…だが、掠らせたが効いたぞ。まさか、因果を逆転させると

は…！ゲイボルク…確か、アイルランドの光の御子だったか？」

「チツ。セイバーと同じく…だな。ここは一旦、引くしかねえか…」

そう言うと、ランサーは槍を消し、セイバーオルタに背を向ける。

「何だ？怯えたか？最速のサーヴァントともあるつものが。」

「フン。こっちは様子見だ。俺のマスターが臆病なだけだ。決着は次の機会だ！」

ランサーはそう叫ぶと、消えた。

「フン…。」

セイバーオルタは胸の鎧を直した後、雅人の方へと歩む。

「…」

雅人はいまだ、立たずにいた。

「立てるか？」

「あ、いや…その、すいません。腰が抜けて立てなくて…」

「ハア…。仕方ない。手を掴め。」

セイバーオルタは右手を差し出す。雅人はその手を掴み、セイバーオルタは雅人を立たせる。

「あのさあ…いろいろと聞きたいことが…」

「何だ？」

「えと、君は、セイバーオルタ…で良いんだよね？」

雅人は恐る恐る聞く。

「そうだ。」

「本物？」

「ああ。私は此処にいるのだから、そうだろう。」

「マジか…。ということは此処は…冬木？」

「フユキとは…この町の名か？」

「ま、まあそうだな。ところで…何で此処に？君はその、イレギュラーのはずなのに…」

「七人のサーヴァントが召喚された後にお前が召喚をしたんだ。それで私がお前のサーヴァントになったのだ。その証拠に、左手に令呪があるだろう？」

セイバ　オルタに言われ、左手を見ると、赤い紋章が刻まれていた。

「ホントだ。という事は、俺は君のマスターで良いのかな？」

「そうなるな。こんな腰ぬけがマスターでは足手まといになりそうだが…。」

セイバ オルタに言われ、雅人はムツとする。その時…

「ん？近くにサーヴァントの気配がするな。それも二体。」

「二体って…あつ（それってアーチャーとセイバーじゃないか!?!?）」

「闘っていないようだ。しかも私達の方へと向かってきてる。向こうも気づいたようだ。」

「ええっ!?!?」

セイバ―オルタの言うことに雅人は驚いた。すると…

「ハアアツ!!」

何者かがセイバ―オルタに切っかかりかかった。セイバ―オルタはそれを防ぐ。

「フツ…」

何者かは後ろに飛ぶ。すると、何者かはセイバ―オルタを見て驚いた。

「私だと!?!?」

「私…?」

セイバーオルタは疑問に思った。そして、月明かりで何者かの姿がはっきり見えてきた。

「貴女は…一体何者だ？なぜ私の姿をしている？」

それはセイバーオルタと似た容姿をした者だった。

「セイバー…。」

「セイバー？ほう、コイツがセイバー、最優のサーヴァントか。」

セイバーオルタは笑みを作りながらセイバーを見ている。そんな時、セイバーの後ろから男性と女性が来た。

「セイバー！いきなり何処に行くんだよ！？」

「全くもう…。」

「シロウ、リン。」

とセイバーその男性と女性を名を口にする。雅人はその二人の事を知っている。

「衛宮 士郎に…遠坂 凛！？」

二人を見た途端、雅人は思わず口にしてしまう。

「なっ！？」

「何で、アンタ、私達の名前を知ってんのよ!？」

「あ…いや、えと…」

雅人はしどろもどろになっていると…

「知る必要はない。なぜなら、貴様らは此処で死ぬのだからな…!」

「え!？」

「くっ!シロウ!リン!下がって!!この二人は…危険です!!」

あちらも臨戦態勢に入る。

「ま、待て待て待てえッ!!」

すると、雅人はセイバーオルタの前に出た。

「なんだ?なぜ待たねばならん。」

「ダメっ!マジでダメえっ!!」

「敵は目の前にいるのだぞ?待つことはない。」

「だからっ!俺は…その、闘う必要がないって思うんだけど…」

「何?貴様…戦う必要はないと言ったな?私の前でそんなことを口にするな…!」

セイバ オルタは雅人に向かって殺気をとばす。

「うっ！だけど…あ、あっちは、なにかもめてるし…」

「何？」

セイバーオルタは振り向くと…

「シロウツ！敵は目の前ですっ！そこをどいてくださいっ！」

「いや、だから！女の子が武器を振り回しちゃいけないってっ！」

「あんたねえ…あいつらは敵よ。何でかばうのよ？」

「いや、その、何か悪い奴には見えなくて。」

「何を言っているのですかっ！兎も角、倒しますっ！」

もめていた。

「…はあ？」

「だろ？ああ、その、アンタ達！」

「」「！」「」

雅人の呼び声で三人は反応する。

「俺達、別に闘う気はない。だから話し合いましょっ！」

「…だってさ。闘う気はないって言っているし。」

「シロウ。」

「まあ、仕方ないわ。一時、休戦としましょ。」

「だってさ。話し合おうか?」

「助かる?。」

そんな中、セイバーとセイバーオルタは睨みあっていた。

「「フンッ!」「」

「「…なんでさ。」「」

二人は咳いたとな。

第二話（後書き）

さてと、次回はこの後編。たぶん、あの神父がでてくるかもっ！それではお楽しみに！

それと・・・感想くださいっ！！

第三話（前書き）

今回はほぼアニメどおりに台詞もアニメが混じってます。
それではスタート。

第三話

衛宮家

「（本物の士郎の家だ…！）」

雅人は内心、感激に満ちてる。そもそも、なぜ衛宮家にいるかは…

「はい、これでよしとっ。まあ、衛宮君もこれぐらいできると思っ
けど。」

ランサーとの戦闘で壊れた部屋の修理と、話し合いだ。

「凄い。俺はこんなことできないからな。」

士郎の一言に、凜は驚く。

「え？こんなの、どこの流派でも、初歩の初歩よ？」

「俺は、親父にしか教わった事がないから、基本とか、初歩とか知
らないんだ。」

「はあ？五大要素の扱いとかパスの作り方とかも知らない？」

「ああ。」

「はあ…じゃあ、あなた素人？」

凜は呆れた声で言う。

「一応、強化の魔術ぐらいは…」

「また、なんとまあハンパなのを使うのねえ。それ以外はからつきしなわけ？」

「まあ…たぶん。」

「はあ…なんだってこんな奴にセイバーが呼び出されるのよお。」

凜はふと、雅人とセイバーオルタを見る。

「あつちはあつちで、イレギュラーねえ。普通、セイバーは二人もいないわ。それに、姿が似ているし。まあ、服装やら、髪や目の色は違うけど。それに、もう、マスターは七人、そろったのに…。」

「なあ、遠坂。さっきから気になったけど、マスターってなんだよ？セイバーも俺をマスターって呼んでたし…。」

「ハア。貴方はね、あるゲームに巻き込まれたのよ。「聖杯戦争」っていう、七人のマスターの殺し合いに。」

「聖杯戦争！？殺し合い！？」

「衛宮君はマスターに選ばれたのよ。どっちかの手にせいこんがあるでしょ？三つの令呪。それがマスターの証よ。」

士郎は自身の左手を見る。確かに、赤い紋章が刻まれている。

「何十年に一度、七人のマスターが選ばれ、マスターにはそれぞれサーヴァントが与えられて、聖杯を奪い合う戦いが行われる。私もマスターに選ばれた一人よ。令呪がある限りはサーヴァントを従えていらるわ。令呪は絶対命令権なの。サーヴァントの意志を捻じ曲げてでも、言いつけを守らせるのが、その刻印。ただし、使うたびに、一つずつ減っていくから、使うなら、二回にとどめておきなさい。」

「待てって、一体何の事だよっ！？」

まだ状況を把握しきれていない士郎は凜に質問するが…

「貴女はまだ不完全な状態ね。マスターとしての心得がない…魔術師見習いに呼び出されたんだから。」

華麗にスルーし、セイバーを見る。

「ええ。士郎には、私を実体化させるだけの魔力がない。霊体に戻ることも、魔力の回復も難しいでしょう。」

「ハアア…私が貴女のマスターなら、どっちも簡単にできるのにい。」

「それって、俺がふさわしくないってことか？」

「当然でしょ、へっぽ」！

「う…！」

凜に言われ、士郎は黙ってしまふ。そんな光景を一人の人間とサーヴァントが見ていた。

「大変だなあ。士郎は。（アニメで見たからわかるけど。）」

「フンツ！おい、なぜこいつらを倒さぬのだ？今なら殺れるぞ？」

セイバーオルタは不満の様子。

「まあまあ。さっきも言ったでしょ？あの人たちとは戦う必要はないって。」

「なぜ、わかる？」

「あの人たち、案外、良い人たちだし。ね。」

「フン。この聖杯戦争に、優しさや甘さはいらん。良い人間も、いないのだぞ？」

「だけど、現に、士郎は敵である俺達を悪い人には見えないって言うてくれたし、家に連れて来てくれたじゃないか。」

「それは奴が、甘さを捨てきれないからだ。マスターとなったのなら、甘さを捨て、非情にならねばならんだ。」

「非情って…」

「お前も、非情にならねばならん。そついつウジウジした性格を直せ。虫唾が走ってならん。」

「うっ！」

雅人は黙り込んでしまつ。すると…

「さてと。次はアンタ達に聞きたいことがあるんだけど？」

凜が言いながら来た。

「何？」

「まずはアンタは魔術師なのよね？」

「…たぶん。ランサーが言ったのなら、間違いない。」

「ランサー？アンタ、ランサーと会つたの？」

「ああ。その時にランサーが、「お前から凄い魔力を感じる」って言つてた。」

「私からも感じる。良い？アンタの魔力は規格外よ？それなのに自身に魔力があること知らないなんて…で、二つ目は、そのサーヴァントよ。」

凜はセイバーオルタを見る。

「セイバーに似ているけど、アンタはこの英雄よ？」

「私も気になります。」

「…ソレを聞いてどうする？」

「どうもしないわよ。」

「…わからないな。」

「はぁ？わからない？」

「自分がどういう英雄だったか、自分は何者だったか、わからないのだ。ただ、わかることは、自身のクラス。他のサーヴァント。それと、今までの聖杯戦争についてだ。」

「ハア…。アンタもセイバーと同じく、不完全な状態ってわけね。霊体化は？」

「…なぜだか、できん。」

「そう。バカでかい魔力を持ったマスターでも、知識がないし、魔術師でもないなら、魔力供給も不安定なんでしょうね。」

凜は雅人をジッと見る。

「あ、あはは…。」

「ハア…もういいわ。さてと、じゃあ行きましょうか。」

「え？どこへ？」

「この戦いを監督してるやつ所よ。」

ソレを聞いた雅人は…

「（言峰 綺礼の所か。たしか…あれ？）」

雅人はなにか考え込む。

「（言峰って、誰のマスターだけ？あれ？俺、覚えてるはずなのに？）」

「何、ぼさつとしているのだ？さっさと行くぞ。」

「あ、待ってくれよッ！」

雅人は考えるのをやめて皆の後について行った。

「監督って此処にいるのか？」

「そうよ。」

「シロウ、私は此処に残ります。」

そうしているとセイバーが言った。因みに、セイバーは鎧を脱ぎたくないとのことで、フードを被っている。

「私はシロウを守るためについてきたのです。目的地が教会なら、これ以上遠くへは行かないでしょう。」

「では、私も残ろうか。」

「セイバーオルタ？」

「私はその監督とやらに会いに行く必要はないのだからな。この女が、お前を襲ったりしないか、見張っている。」

セイバーオルタはセイバーを見ながら言った。因みに、セイバーオルタも同じく、フードを被っている。

「私はそのようなことはしません。」

「どづかな？いざとなれば、そうするのだろっ？」

「では、そういう貴女はどうなのですか？もしもの時だってありますよ？」

「さあな。まあ、潰す時はちゃんと潰すがな。」

「っ！！剣を取りなさいっ！今すぐ、決着をつけます！」

「フツ…よかろう。かかってこい。」

二人は睨みあい、フードを取ろうとした時…

士郎「やめんかお前らアアアアアッ！！！」

士郎が止めに入った。

「セイバーオルタ！なんも、争うことはないだろっ！つか、何でそんなにセイバーを嫌うんだ！？」

「ただ単に、コイツが気に入らないだけだ。同じ顔をしているのだからな。」

「あのねえ…。」

「アンタ達、もう行くわよ？」

凜の声が聞こえたので、雅人と士郎は、二人に喧嘩はやめろよと言
い、中に入って行った。凜から、言峰 綺礼について説明されてい

ると…

「私も、師を敬わぬ弟子など、持ちたくなかったよ。」

一人の神父があらわれた。この男が、言峰 綺礼だ。

「七人目と、イレギュラーのマスターを連れて来たわよ。一応、魔術師だけど、中身はてんで素人だから…見てられなくて…。」

「君らの名は何と言うのかな？」

言峰は聞いてきた。

「…衛宮 士郎。」

「衛宮…士郎……………フッ」

士郎の名を聞くと、言峰は静かに鼻で笑う。

「そして君は？」

「…如月 雅人だ。」

「如月 雅人か。ところで 衛宮 士郎、君はセイバーのマスターで間違いないかな？」

「それは違う！」

「ん？」

「マスターとか聖杯戦争とか、俺にはてんでわからない。」

「フツ。これは重傷だな。よかろう、凜が私を頼ったのはこれが初めてだ。衛宮 士郎に感謝しても、したりないな。」

言峰は士郎に、聖杯戦争について、説明した。そして…

「改めて聞こう。衛宮 士郎、選ばれしマスターとして、この聖杯戦争を戦う意思があるや否や。」

言峰は聞く。士郎は…

「戦う。10年前の火事の原因が聖杯戦争だっていうなら、あんな出来事を二度も起こさせるわけにはいかない！」

「決まりね。」

「ふむ。では次は如月 雅人。少し、調べたいことがある。」

「ん？」

「君のサーヴァントについて。そして、君の魔力を計らせてもらう。この紙にふれてくれ。」

「こうか？」

雅人は紙に触れると、何やら、文字が浮かんでくる。

「ふむ。これが君の魔力数値。そして、現在所持しているサーヴァントの数値だ。」

言峰は紙を見せた。

「ん？」

雅人は紙の内容を見る。

如月 雅人

魔力 EX

「ハアツ!？」

「どづいつ事よ!コレ!?!?」

「つか、魔力だけ!?!?身体能力とかは!?!?…まあいいや。セイバーオルタは?」

下を見てみると…

セイバーオルタ

クラス：セイバー

魔力A A +

筋力A A A +

俊敏A A +

幸運A A

体力A A +

耐久A A +

宝具E X

ソレを見た三人は驚くしかない。

「チートすぎない？これ？」

「いや、チートの度を越してないか？」

「（ランサーとの戦いで見たけど、原作よりも強過ぎではないか？
良く考えれば、刺し穿つ死刺す槍ゲイボルグだって、まともに受ければ、必ず
死ぬのに…頑丈すぎる。」

雅人はランサーVSセイバーオルタの時の思い出しながら思う。

「コレ、明らかにセイバーを超えてるし…クラスもセイバー!？」

「このサーヴァントはあまりにも、強すぎる。最強のサーヴァント「バーサーカー」を超えている。もしかしたら、マスターである君と何か関係がありそうだな。」

「俺と？」

「君は普通の魔術師と違い、何も鍛えずして魔力が大きすぎる。それが無意識にそのサーヴァントに流れているやもしれん。」

「でも俺、魔力供給もできないぞ？そんなことができるわけない。」

「言ったはずだ。「無意識」に…とな。」

「…」

「さてと、もう帰りましょう。」

凜は戻って行く。士郎と雅人も帰ろうとした時…

「喜べ、衛宮 士郎…！君の願いはようやく叶う。」

「っ…」

「明確な悪がいなければ、君の望みは叶わぬ。例えそれが君にとって容認しえぬものであると、「正義」に対立すべき「悪」が必要だ。」

士郎は何か、不快な感じになる。

「君にとって、最も崇高な願いと最も醜悪な望みは同じ意味を持っている。なに、取り繕う必要はない。君の葛藤は人間として、とても正しい。」

士郎は無言のまま教会を出た。一方、雅人は言峰を見つめている。

「ん？何かな？」

「…いや、なんでもありません。」

雅人は教会を出る。

「君もまた、衛宮 士郎と同じか…。」

帰り道

「義理は果たしたわ。」

「遠坂つて、良い奴なんだな。」

「はぁ？おだて立って手は抜かないわよ？」

「っ！シロウ！」

「っ！」

「ん？」

セイバーに言われ、士郎と凜は振り向くと、そこにいたのは…

「フフフ」

「…」

雪のような白い髪に、紫の服を身にまとった少女と、2〜3メートルはあるだろう上半身裸で手に巨大な刃と持った大男がいた。

「こんばんわ、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね。」

少女は呟いた。その少女と大男を見た雅人は…

「イリヤに、バーサーカー…！？」

と呟いたのであった。

第三話（後書き）

やばい。原作の内容をド忘れしているし、セイバーオルタが強過ぎや、誤字があるとか書かれていて、何か、元気を失ってきたあ。

雅人「今回、後書きに登場、雅人だ。まあそんなに沈むな、作者。誰だって、最初はそうなるぞ？」

でも、俺は二作も書いているぜ？

雅人「このFateの物語は初めてなんだろ？仕方がないって。」

うう。

雅人「もういいや。次回をお楽しみに。」

第四話（前書き）

先に言いたいことがあります。この物語はアニメの通りに進みます。それと原作を知らないので、脚本書き、台本書きというのはご承知ください。

それではスタート。

第四話

「フッフ」

「…」

雅人たちの前に少女と大男が立っていた。

「こんばんわ、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね。」

「やば…っ！アイツ、けた違いだ…！」

凜は額に汗を流しながら言う。

「初めまして、リン。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。って言えば、わかるでしょう？」

「アインツベルン！」

何やら凜は知っているようだ。

「知ってるのか？遠坂。」

「この聖杯戦争に何度も参加してる奴らよ…！」

「ウッフ、これ以上のあいさつはもういいよね。どうせ此処で死んじゃうんだし！」

イリヤは冷たい瞳を見せながら、そう言う。

「っ！」

「じゃあ、殺すね。殺っちゃえ、バーサーカーッ！！」

「ッ！！！」

ドンッ！

イリヤが叫んだ同時に、バーサーカーと呼ばれる大男は地面を蹴り高くジャンプする。

「！！！！」

バーサーカーは雄たけびを上げながら、襲い掛かってくる。土郎と凜、そして雅人はバーサーカーの迫力と威圧感に動けないでいた。そんな時だ。

「シロウ、下がってっ！」

「っ！セイバーッ！」

セイバーがフードを脱ぎ捨て、バーサーカーに突っ込んだ。

「！！！！」

バーサーカーは手に持っている大剣でセイバーに斬りかかる。

ガキンッ！

セイバーは見えない剣で防ぎ、押し返そうとする。

「
！」

だがバーサーカーは気にせず、大剣を振るう。

「くっ！フッ！ハッ！」

セイバーはそれを剣で防ぎ、避ける。

「セイバーッ！」

「あんな馬鹿でかい剣をまるでおもちゃみたいに……！！！」

凜はバーサーカーの力に驚いた。

「フフ やっちゃえ、やっちゃえ」

対するイリヤは楽しそうにしている。

「
！！！」

「くっ！」

バーサーカーの猛攻をセイバーは避け続け、電線の上を走り、イリヤの所まで来た。

「……」

「ムッ……！」

「……！！」

互いに睨みあっていた時、バーサーカーがイリヤを守ろうとセイバーに斬りかかる。

「くっ！」

セイバーは剣で防ぐが……

「……！！！」

バーサーカーに力負けしてしまう。

「うわあっ！」

セイバーはそのまま電柱にぶつかる。

「セイバー……ッ……！」

「アハ バーサーカー、そこよっ！ひと思いに仕留めてしまいなさいっ！」

「く……！」

セイバーは剣を棒代わりにして体を起こす。

「！！！」

バーサーカーは地面に向かって剣を振るう。

バキバキバキッ！

地面は音を立てながら割れ、その地割れがセイバーを襲う。セイバーはそれを避け…

「ハアアッ！！！」

バーサーカーに斬りかかる…が、防がれてしまう。セイバーは体勢を立て直すため、バーサーカーから距離を置いた時…

ズキンッ！

「うっ！！！」

胸に痛みを感じ、膝をついてしまう。セイバーは前にランサーと闘い、ランサーの宝具の攻撃を受け、胸に傷を負っていたのだ。

「くっ！やめろオッ！」

士郎はセイバーを助けるため向かうが、凜がソレを止める。

「遠坂！何を…！？」

士郎は言っているが、凜は無視し、前に立ち、左手を前にかざす。

「Vier Still... Erschiebung」

何やら呪文を唱えると...

ダダダダンッ！！

左手の人差し指から、黒い弾丸... ガンドが飛び、それがバーサーカーに当たる。凜はなおも弾丸を撃ち続けるが、バーサーカーはそれを受けても平然としている。

「っ！なんてデタラメな体してんのよっ！コイツっ！！」

「ダメだ...！逃げる！セイバーっ！！」

「く...！」

だが、セイバーは逃げようとしなかった。その光景を見ていた雅人は...

「セイバーオルタ！セイバーを助けるんだっ！」

セイバーオルタに言うが...

「断る。何で私のような事をしなければならん。」

セイバーオルタはそれを断った。

「頼むよっ！セイバーがピンチなんだ！！」

「フンツ。奴がどうなるうが、私が知った事ではない。それに、サーヴァントが一人消えてくれればこちらとしては、ありがたいな。」

「セイバーオルタ…！」

雅人はセイバーオルタを見ていると・・・

ズバアッ！！

「うああっ！」

「っ！！」

後ろから何かを切り裂く音と、セイバーの悲鳴が聞こえた。振り返って見てみると…

「ぐうう…！！」

腹あ頭から血を流し、目を赤くさせたセイバーの姿が目に入った。

「セイバー…！セイバーっ！」

士郎はセイバーに駆け寄ろうとするが、セイバーが手を出して止める。

「セイバー…」

「く…うう…！」

セイバーは剣を棒代わりにし、ボロボロの体を起こそうとする。

「セイバーオルタ！あんなの見ても、お前はどうも思わないのか！？」

「……………」

「どうなんだよっ！セイバーオルタツツツ！！！」

雅人はセイバーオルタに問う。

「ウフフ 勝てるわけじゃない。私のバーサーカーはね、ギリシャ最強の英雄なんだから。」

そんなことをしている内にイリヤが余裕の表情をしながら言った。

「ギリシャ最強の英雄…まさかっ!?!」

凜は何か勘づいたようだ。

「そうよ、そこにいるのは「ヘラクレス」って魔物。」

「ヘラクレスッ!?!」

「そう。貴方達程度が使役できる英雄とは格が違う。最強の怪物なんだから…!」

「……」

凜はそれを聞いて声がでなかった。

「いいわよ、バーサーカー。そいつ再生するから、首をはねてから殺しなさい。」

「っ！」

士郎はセイバーを見る。

「ッ！」

その間にバーサーカーは大剣を構える。

「俺は…俺は…!!！」

士郎の感情に反応しているかのように、令呪が赤く輝きだす。それが一瞬、ピカツと光った時…

士郎「このおおおっ!!！」

バーサーカーが大剣を振り上げると同時に士郎が動き、セイバーをかばおうとセイバーの体を掴み、押した。

「!!！」

バーサーカーの大剣は止まらず、士郎を斬ろうと迫る。

「くっ！」

そんな時だった。

ガキンツ!!!

士郎に当たる直前、何か士郎の前に立ち、バーサーカーの大剣を
防いでいた。

「フン。デカブツめ…なかなかのパワーをしているな…！」

それは、見えない剣でバーサーカーの大剣を止めているセイバーオ
ルタであった。

「ハアアツ!!!」

セイバーオルタは押し返し…

ドオツ!!!

バーサーカーに接近し、拳をぶつけた。

「!!!」

バーサーカーは吹っ飛び電柱に衝突。

「バ…バーサーカー!？」

イリヤは驚く。しかし、驚いのはイリヤだけではなかった。

「お、お前、どうして!？」

士郎と凜、そしてセイバーだった。

「勘違いするな。そこにいる私のマスターが、助けてやってくれと
うるさかったからだ。」

セイバーオルタはため息交じりでそう言い、雅人に指差す。

「あ、あんな頑丈な体に拳をぶつけて吹っ飛ばすなんて…。」

凜は驚きながらつぶやいた。

「くっ…バーサーカーっ！立ちなさいっ！セイバーは後でいいわっ
！先にコイツを殺しなさいっ!！」

イリヤが命じると、バーサーカーは体を起こして咆哮する。

「フン。うるさい奴だ。近所迷惑にもほどがあるな。」

「どうするんだ!？アイツ、まだ立ち上がるぞ!？」

「貴様は、セイバーを連れて離れている。その女もだ。貴様の魔
術では、コイツには傷一つ付けることはできないのはわかっただろ
う。」

「くっ…！ここは、アイツの言う通りね。士郎！セイバーを連れて離れるわよっ！」

凜は士郎に向かって叫ぶ。

「セイバー、大丈夫か！？」

「く…！」

士郎はセイバーの体を支え、離れる。離れたことを確認し、セイバーオルタは雅人に顔を向ける。

「お前もだ。早く離れろ。」

「いや、俺はいるよ…！」

「なに…？」

「セイバーオルタを一人にさせるわけにはいかないし、何より…俺は、その…セイバーオルタのマスターだから…！」

雅人は言うが、足が震えているため、説得力がない。

「ハア…わかった。なら、私の後ろにいる…！」

セイバーオルタはバーサーカーを見上げながらそう、雅人に言う。雅人は言われた通り、セイバーオルタの後ろに行く。

「……………！！！」

バーサーカーは大剣を振り上げる。

「フンッ！」

セイバーオルタは前へ進み、大剣を防ぐ。

ガキンッ！

ソレをはじき、バーサーカーを斬る。

「
」！
」

バーサーカーに防がれるだが、セイバーオルタは止まらず、連打をする。

ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！！

しばらくすると、バーサーカーの大剣を持っている手が震えはじめた。そして…

セイバーオルタ「ハアアアッ！！！！」

ガキンッ！

何度目かのセイバーオルタの打撃が大剣に直撃し、バーサーカーはそれを手放してしまった。

「隙ありだ…!!」

セイバーオルタは上段からバーサーカーを切り裂いた。バーサーカーの体から大量に血が飛ぶ。

「
…!!」

バーサーカーは小さく声を上げて…

ズズーンッ!

倒れた。

「フン。」

セイバーオルタは冷たい瞳でバーサーカーを見た。

「ば、バーサーカー…?」

イリヤは茫然とする。

「あ、あんなに強かったバーサーカーを一撃で斬り倒した…!?!」

凜や士郎、セイバーは啞然とした。

「せ…セイバーオルタ、強過ぎだろ…!？」

雅人もまた、セイバーオルタの強さに驚き、啞然としていた。その時だ。

「フフフ…」

イリヤが静かに笑い始めた。

「…何がおかしいのだ？」

「フフ 凄いね。まさか、私のバーサーカーを一度、殺しちゃうなんてね。」

イリヤが呟くと、先ほど、死んだはずのバーサーカーが立ち始めた。

「うそっ！死んだはずなのにッ!？」

「フフフ 教えてあげるわ。私のバーサーカーはね。12の命を持つてるのよ…!」

「12もっ!？そんなことが…」

「あるんだよ、お兄ちゃん。凜、貴女は知ってると思うけど、ヘラクレスは己が罪を償うために12の試練を乗り越えその褒美として不死になった。それが私のバーサーカーの宝具、十二の試練。バーサーカーは今ので、一度死んじゃったけど、まだ後11の命を持つてるの。しかも、死ぬたびに、命と引き換えに強くなるんだから…!」

「ウソでしょ…！？まだあと11回もコイツを殺さないといけないの！？」

「フン。上等だ。その残る11の命…この私が全てもらっつー！」

セイバーオルタは構えるが…

「…殺そうと思ってたけど、中々、楽しかったから、今日は見逃してあげるわ。」

イリヤがそう呟くと、バーサーカーは消えた。

「逃げるつもりか…？」

「貴女から見ればそうなるかもね。あ、それと凜、次会ったときは…殺すから。」

凜にそう言い、イリヤはその場を去って行った。

「フン。」

セイバーオルタは雅人の方へ戻る。

「奴らは逃げた。私達も、この場から離れよう。さっさと立て。」

セイバーオルタは雅人に言うつと…

「ごめん。腰が抜けて立てません。」

雅人は緊張が途切れて、腰が抜けてしまったようだ。

「仕方がない。ほら、さっさと立て…！」

セイバーオルタは雅人を立ち上がらせる。

「ありがとう。」

「フン！全く、こんな奴がマスターだと、先が思いやられるな。」

「うう…。」

二人は士郎たちの方へ行き、その場を後にしたのだった。

第四話（後書き）

さてと、バーサーカーを倒してしまった。つかホントに強くし過ぎたな。

「原作を超えてるぞ？」

うむ、ま、いいや。

雅人「あのなあ」

続きをお楽しみに。

第五話

バーサーカーを倒した後、全員は衛宮家に来た。

「ハア… ホント、アンタのサーヴァントって相当の規格外ね！」

凜がこちらを睨みながら、そう言う。

「あ、あはは… (こ… 怖えええええええつ!!!!)」

ソレを見た雅人は内心恐怖した。

「(… セイバーでさえ苦戦していたバーサーカーをいとも簡単に倒すなんて… 本当に規格外すぎる！アーチャーでさえ、瞬殺される恐れがあるし… セイバーと手を組んでも歯が立たないかもしれない… ! 敵に回すのは… 絶対に避けないと…!!)」

凜は考え込んでいると…

「あのさ、そんなピリピリしてないでさ… ほら、お茶でも飲んで少しは落ち着いたらどうだ？」

士郎が言ってきた。凜は無言でお茶を口にす。

「…ハア、ろくなお茶がないのね。ティーバックでも、せめて三角のを常備しておきなさい」

「はあ…。」

「（結構、うまいのになあ）」

雅人はお茶を飲みながらそう思う。そして、ふと雅人は考えた。

「（それにしても、魔術師でもない、この世界の人間でもない俺になぜ魔力が？ランサーや凜が、俺から凄い魔力を感じるって言うていたし、あの紙でEXランクって書かれていたし、すごい魔力だったのはわかったけど、実感がな。つか、ホントに魔力があるのか？って思っちゃう。それに…俺はFateの事は知っているのに、言峰が誰のマスターで…展開があやふやになってしまっている。どうなっているんだ？」

雅人は思っていると…

「さてと…皆に一つ、提案があるわ」

「提案？」

「此処にいる全員で、手を組みましょう」

凜が言った一言に、雅人とセイバーオルタ以外の人が驚く。

「手を組むって俺と遠坂と如月がか！？」

「ええ」

「なぜそのような事を？」

士郎とは違い、セイバーは冷静に聞く。

「今回のバーサーカーとの戦いでセイバーオルタが一回倒したけど、まだ奴には残り11の命がある。それに、セイバーオルタが助けに行かなかつたら、私達は殺されていたわ。今、私達の共通の敵はバーサーカー。そこで、私達はお互いに手を組んで倒すって事。わかつた？」

「ああ。ていうか、本当に良いのかよ？手を組んで…」

「聖杯戦争に、「手を組んではいけない」ってルールはないわ。一時的なだけだしね。で、どうなの？」

凜は皆に聞く。

「…わかった。その話に乗るよ。遠坂や如月がいてくれれば心強いし。セイバーはどう？」

「ええ。私もその提案に賛成です。リンは敵ではありませんが…信用はできません。それに、気に食わないですが、セイバーオルタも信用はできるぐらいです」

「気に食わないは、余計だぞセイバー？」

セイバーとセイバーオルタは睨みあっていた。

「だから、なんでさ…」

雅人と士郎は同時に呟いた。

「あゝ…オホンッ！で、如月君はどうなの？」

凜は次に雅人に聞く。

「まあ、俺は良いと思うが…セイバーオルタが…」

雅人はセイバーオルタの方を見ると…

「フンッ！私はお断りだ！こいつらと手を組むと、ますます足手まといが増えるだけだっ！それに、バーサーカーは私一人でも倒せる！」

セイバーオルタは却下した。

「セイバーオルタ、手を組んだ方が良いつて」

「うるさい」

「ねえ…」

「しつこいぞっ！私は断じてこいつらと手を組まん！！」

いくら言ってもセイバーオルタは断固拒否。雅人は、ため息をついた。

「ハア…じゃあ、俺達の住める場所はなくなつたな。」

そう雅人は呟いた時だ。

「住める場所がなくなっただと？どういうことだ？」

セイバーオルタが聞いてきた。

「ま、まあ、簡単に言っちゃあ…俺、住んでる家がない。」

雅人のこの一言で…その場は静まり返った。

「……え？じゃ、じゃあ、アンタって…どこに住んでたわけ…!？」

「えと…俺は…その…別の…っ!！」

雅人は何か言おうとしたが、言わなかった。いや、言えなかったのだ。

「（おい…どういうことだよ!？何で声が出ない!？）」

雅人は必死で言おうとするが声がでなかった。

「一体どうしたんだよ？」

「…あ、いや、なんでもない。（やっと声が出せた…。）」

「さっき、言いかけた「別の」とは？別の町から来たのですか？」

「あ、いや、その…気が付いたら、俺はこの町にいてな。記憶がどつもなあ…」

雅人はそう言って誤魔化した。

「ということは…アンタって記憶喪失なの！？ホント、あり得なさすぎよ…。」

「じゃあお前、これからどうするんだよ？」

「いやな、最初は士郎に頼もうかなと思っていたが、セイバーオルタがこんな感じだから、無理だし…野宿でもしようかなと」

「野宿だとっ！？私に野宿させるつもりかっ！！？」

雅人がそう言った途端、セイバーオルタは凄い剣幕で迫ってくる。

「い、いやさあ…セイバーオルタが士郎やセイバーを嫌っているのなら、一緒には住めなさそうだし、俺は住める場所がないから野宿するしか方法はないぞ？」

「なっ！？」

「ま、まあ、セイバーオルタが士郎やセイバーと仲良くしてくれるのなら話は別だけど…」

「くっ！」

「どっ？」

雅人は聞くと…

「わ、わかったっ！手を組んでやるうではないかっ！！！」

セイバーオルタはそう言った。

「ふう、はい、決まり。という事で俺達も手を組もう」

「そ、そう。(ふう…敵にならなくて良かったあ…)」

凜は内心ほっとする。

「あゝ、それと士郎…頼みたい事が…」

「ああ、もうさっきのでわかった。良いぜ、俺の家って旅館みたいに広いし、部屋がいくつもあるから、そこ使えよ」

雅人の頼みを察したのか、士郎は雅人にそう言った。

「助かるよ」

「ま、話はここまでとして、衛宮君、私も此処に泊まらせてもらおうよ?」

「はあっ!?!何で遠坂が!?!」

「私はアンタ達のような素人とは違って、魔術の知恵があるわ。なるべく一か所にいた方が楽でしょう?私は家に戻って、荷物を纏めてからまた此処に来るわ。その時は部屋を用意しなさいよ?」

凜はそう言って部屋を後にした。

「なんでぞ…」

「まあ、士郎、どんまい」

雅人は士郎に言ったのであった。その間、セイバーとセイバーオルタは互いに睨みあい、見えない火花を散らせていた。

数十分後

「うん、此処にするわよ。衛宮君」

「ああ。で、雅人はどうするんだ？」

「俺は何処でも良いぞ？」

「私はコイツと同室だな。」

「っ！ハアツ!？」

「貴様が万が一に何かあつて殺されてでもしたら私が困る。だから護衛のために一緒の部屋にいた方がよからう。」

「お、俺は…し、心配はいらないぞ?」

「シロウ、私も貴方と同室でお願いします。敵に狙われたら困りますので。」

「セイバー!?!」

士郎と雅人は驚いてばかりである。

「はい、じゃあ決まりということで御飯にしましょう。あ、でもその前にシャワーが浴びたいわね。」

「ちよっ! まで、遠坂! そっちはトイレだ!?!」

「おい、赤髪! 私とコイツの部屋はどこだっ!?!」

「シロウ、まず食事にしましょう。腹が減っては敵には勝てません。」

こんな感じで一日が過ぎて行った。

雅紀とセイバーオルタの部屋

「あの…ホントに一緒じゃないと…ダメ？」

「さつきも言ったろう。殺されてでもしたら私が困ると。だから一緒だ！」

雅人の質問にセイバーオルタは強く言った。雅人は諦めてため息をつく。

「あ、ところでその鎧はどうするんだ？寝るの邪魔になりそうだけど…」

セイバーオルタはまだ漆黒の甲冑を着こんでいる。

「…仕方ない。解除する」

セイバーオルタは呟き、甲冑を解除し始める。

「ちよっ！何で此处で解除するんだよ！！？／／／」

雅人は顔を真っ赤にし、後ろを向く。

「何も恥ずかしがる事はなかるう。ただ単に、素肌が見えるだけだ」

「だ、だからってなあ…！！／／／」

「ほら、こっちを向け」

「え…っ！！？／／／」

セイバーオルタに言われ、不意にセイバーオルタの方を向いた途端、雅人は先ほどよりも顔を真っ赤にする。それもそのはず、今のセイバーオルタは服も何も着ていなかった。

「フン。私の体をそんないやらしい目で見るとはな」

「ハッ！／／／」

「どうだ？少しは欲情するだろう？」

セイバーオルタは雅人に近づいて行った。

「ううう…も、もう寝るっ！お休みっ！！／／／」

雅人は勢いよく布団を被り眠った。

「フン。弱虫なだけかと思っただら…なかなか、可愛らしい所もあるのだな。」

セイバーオルタは呟きながらセイバーオルタは何も着ないで、布団に入って眠った。

翌日

「すう…すう…」

雅人は寝ている時だった。

バカーンツ！バチイッ！！

という音が外から聞こえた。

「ふえ…なんだ!？」

雅人は体を起こして、外を見てみると…

「ハアアアッ!!!」

「フンツ！」

セイバーとセイバーオルタが私服姿で竹刀を持って激しい戦いをしていた。

「な、何してんのっ！？二人ともッ！！？」

雅人の声が聞こえ、二人は戦いをやめる。

「マサト、早いお目覚めですね。」

「音が聞こえたからな……ってそんなことより！何してんのっ！？」

「見てわからんのか？闘っているのだ。」

「いや、何で戦うんだよっ！？」

「コイツが、手合わせ願いたいと言ってきたから、それに応じてやったのだ。」

「彼女には負けたくありません！」

「フンッ！せいぜい足掻くがよいつー！！」

そう言っつて二人はまた戦いを始めた。

「いや、もうやめんか、お前らああああアアアッ！ー！！」

雅人の声が辺りに響いたとな。

第五話（後書き）

次回は…ライダー、現る！！たぶん。

雅人「いや、たぶんじゃ意味ねえだろっ！」

第六話（前書き）

今度から台詞の前に名前を書かないことにします。
では・・・スタート。

第六話

衛宮宅

「マズイ……。」

皆が朝食を取っていると・セイバーオルタが呟いた。

「マズイ……とは？まさか御飯がマズイと……？」

セイバーはセイバーオルタを睨みながらそう聞く。

「ああ、そうだ。マズイのだ。私の口には合わん。」

セイバーオルタは平気で言った。ソレを聞いてセイバーは怒った。

「このような美味しい御飯をマズイだとっ！？貴女の味覚がどうかしているのですっ！！」

「フンツ。味覚など関係なかるう。私は食えん。」

「貴女という人は……！そこになおりなさいっ！食べ物的大事さをうんと教えましょっ！！」

「やれるものならやってみる・・・！」

と二人はその場で睨みあう。それだけで、穏やかだった食卓が一気に波乱へと化した。

「おい・・・雅人。どうかかしてくれ」

士郎は雅人に言う。

「なぜ俺！？」

「セイバーオルタはお前のサーヴァントだろ？なら止める方法ぐら
いわかるよな？」

「俺、わかんねえよ・・・うん・・・どうすれば・・・」

雅人は考えながら御飯とセイバーオルタを見ると・・・

「そっかつ！」

と何やらひらめいた様子で士郎に言った。士郎はそれを聞いて驚く。

「え！？それで止められるのか！？」

「今はそれしか方法はない！料理ができる士郎にしか頼めない！頼
むっ！！！」

と雅人は土下座する。

「わ、わかった、わかった！ともかくやってみるよ。」

「大至急！」

士郎は急いで台所に向かった。

「食べ物を粗末にするものは許しません！」

「フン……なら、勝負するか？互いの剣を使ってな……」

「望むところです。」

と二人は何処から出したのか、竹刀を持って庭に行くことにした。

「凜、そんなところで笑ってないで、コレをどうにかするか考えてくれ……！」

「無理よ、私じゃ二人は止められそうにないし……それに……」

「それに……？」

「なんだか、楽しそうじゃない、ほっときましょう。」

と凜は邪悪な微笑みを見せる。

「（士郎）~~~~~！！！！早く来てくれ~~~~~！！！！」

雅人は心の奥底で叫んだ……。その時……

「待たせたっ！雅人、コレ！！」

士郎が急いで何かを持ってきて雅人に渡す。

「ナイスタイミング！！」

雅人はそれを受け取り、急いでセイバーオルタの元へと行った。

「・・・勝負っ！」

「フン・・・絶望を知れ・・・！」

一方の二人は殺気を放ち・・・戦闘態勢に入ると・・・

「ちょっと待ったーーーーーっ！！！」

とそこへ雅人が割って入ってきた。

「マサトツ！そこをどいてくださいっ！彼女に食べ物のありがたみを教えねばならないのですっ！！！」

「いや、待ってよっ！セイバーオルタ・・・ちょっと、一回コレを食べてみて。」

と雅人はセイバーオルタに何か渡した。

「・・・それは何だ・・・？」

「・・・ハンバーガーだ・・・。」

と雅人は真剣な表情でセイバーオルタにハンバーガーを渡す。セイバーオルタは無言で受け取り・・・ソレを口にする。

もつきゅ、もつきゅ、もつきゅ・・・

「っ！コレは・・・！」

セイバーオルタは驚いた表情をする。

「中々の美味だっ！うむ・・・美味いつ！」

セイバーオルタは眼を輝かせながらハンバーガーを頬張る。

「な・・・！？」

セイバーはその場で立ち尽くす。

「うむ・・・美味かった。おい・・・コレはだれが作った？」

「えと・・・土郎だけど？」

と雅人は土郎に指をさして答える。土郎は苦笑いの表情をしながらこちらを見ていた。

「ふむ・・・赤髪！！このハンバーガーを30個作れ！！」

「えっ！？30個！？そんな量を作るのに時間が必要だぞ・・・
！？」

「早くしろ・・・！」

とセイバーオルタは殺気を放ちながら、士郎を見る。士郎は雅人を見ると、お願いと手を合わせていた。

「わかったよ。今作るから！」

とまたもや士郎は台所へと姿を消した。

「……ま……マサト！アレは食べ物のですかっ！？」

セイバーは雅人に聞く。

「そうだけど？」

「あれは……雑料理ではありませんかっ！あんなのが食べ物など、私は認めませんっ！！」

「貴様……ハンバーガーを雑料理だと……？聞き捨てならなあ……！」

セイバーオルタは殺気を放っていた。

「あれはどう見ても、手抜きですっ！」

「ふざけるな……！なら、今度は私が貴様にハンバーガーのうまさを教えてやる！」

とまたもや竹刀を持って構えた。

「もう、いい加減にしてくれ……」

と雅人は呟いたのであった。その後・・・土郎が持ってきたハンバーガーで騒ぎは収まった。

1時間後

「はぁ・・・二人は授業中だよなぁ・・・。」

と雅人は自室で横になっていた。因みに土郎と凜は学校だ。

「ふぁぁぁぁぁ。それにしても・・・桜が来なかったな・・・。」

と雅人は呟いた。桜とは間桐 桜という少女で、いつも土郎や藤村大河という教師のために朝食を作ってくれる女の子だ。

「一体どうしたんだろうか・・・。まあいいか。」

雅人はあまり深く考えず、寝がえりを繰り返す。そんな時……

「おい……寝てる暇があるなら付き合え。」

と言う声がし、振り向くと……セイバーオルタがいた。

「セイバーオルタ……どうしたんだ？」

「少しな……お前なら、わかるだろうと思って来たのだ。ついて来てくれ。」

とセイバーオルタは言い、その場を後にする。雅人は体を起こしてセイバーオルタの後に着いて行った。

「此処だ。」

と歩いて数分、セイバーオルタは止まった。

「此処って……風呂場？」

二人がいたのは風呂場だった。

「ああ、昨日は風呂に入る事はなかったからな、朝風呂にと思って……湯を出すにはどうしたらよいのだ？」

とセイバーオルタは聞く。

「何って……コレを捻って……そしてこれを……」

雅人はセイバーオルタに教える。

「ふむ、なるほど・・・では入るとするか。」

とセイバーオルタはその場で脱ぎ始める。

「いつ！待てっ！俺がでて行ってから脱いでよっ！！」

と雅人は急いで風呂場から出て行った。

「フン・・・可愛らしいな。」

セイバーオルタは呟きながら服を脱ぎ、風呂に入った。

数時間後

「うっん・・・」

雅人はなにか考えていた。

「何か今日はあるはずだ……。聖杯戦争に関する何かが……」

雅人は脳裏でFateの事を思い出す。

「もう夕方だし……。士郎達は学校から帰ってくる頃だな……。つて……。学校……。？」

雅人は学校という単語を口にした途端……。立ち上がる。

「そっいえばっ！」

雅人は急いで家を後にするのであった。

学校

「ハア……。ハア……。と……。遠い……。？」

雅人は息を切らしながら学校に来た。

「士郎達はこの学校にいるんだよな……。もう……。人気はないし・

・戦闘が起きていたりして・・・」

雅人は警戒しながら学校に入って行くと、突如、目の前に何者かが現れた。

「っ！・・・アンタは・・・」

雅人は何者かを見て表情を強める。相手は・・・地面につきそうな紫の髪の毛に・・・ボディースーツのようなものを着用し・・・目にアイマスクを着けていた。

「ライダー・・・!!」

雅人は呟く・・・。そう、目の前にいるのはサーヴァント・・・ライダーだった。

「貴方は・・・規格外である・・・8人目のマスターですね・・・」

ライダーは呟く。

「会って間もないですが・・・消えてもらいます。」

とライダーは構え・・・

ドンッ!

一気に雅人に接近した。

「っ!!!!!!」

「楽に逝きなさい・・・」

ライダーは手に持ってある釘で雅人を殺そうとした・・・。

ライダーVS雅人の戦いが始まったのだ・・・。

第六話（後書き）

さてと、早めに次回です。ライダーVS雅人！頑張れ、雅人！

第七話（前書き）

今回は・・・ちよいと短め？
ではスタート。

第七話

「ハアッ！」

ライダーは手に持つ釘を雅人に向かって放った。

「うおっ！」

雅人はそれを避けたが・・・

「ハアッ！！！」

もう一つの釘が左肩に掠った。

「があっ！」

「次は外しません。」

「く・・・！」

雅人はライダーを見た後、その場から逃げる。

「良き判断です。サーヴァントである私とでは・・・戦っても負けるだけですから・・・。」

「・・・く・・・（土郎や凜と速く合流しなきゃ・・・！）」

雅人は全速力で走るが・・・素早いライダーの前では無意味であった。

「ハッ！」

「よっ！はっ！」

雅人はライダーから放たれた釘を交わし続ける。

「なかなかですね。」

「それはどうもっ！」

雅人はライダーにそう言って学校内に入った。

「ハア・ハア・ハア・ハア・此処なら・土郎や凜と会えるかもしれない！」

雅人は走ろうとすると・・・

「ハッ！」

右肩に釘が刺さった。

「があああっ！！！」

右肩から鮮血がほとばしる。そして、激痛が走る。

「今度は心臓を狙いますよ。」

「くっ！！！」

激痛に耐えながら、雅人は体を動かし、学校内を逃げ回る。

「どこだよ・・・二人とも・・・」

雅人は士郎と凜を探すが、一向に見つからない。

「二人はもうこの事態に気付いてるはずなのに・・・」

雅人は一旦、目の前にある教室に入る。

「ハア・・・ハア・・・痛た・・・」

雅人は右肩を触る。

「一方的にやられてちゃ・・・ダメだ・・・何か武器になるものを探して・・・」

雅人は教室内を見渡し、掃除道具入れのロッカーを見つめる。

「ほうきがあれば便利だな。」

雅人はロッカーを開け、中からほうきを取り出す。

「はぁ・・・俺に士郎みたいな投影とか・・・凜みたいなガンド撃ちが使えればなぁ・・・」

雅人はため息を吐きながら教室の奥の机を背にし・・・座り込む。

「はぁ・・・心臓バクバク・・・」

自信の鼓動を感じながら言う雅人・・・すると・・・

ジャララ・・・

という音が響いてきた。

「来た・・・。」

雅人は構える。コツ・コツ・と一歩、一歩、確実にこちらに向かって来ているのがわかる。

「怖がるな・・・怖がるな・・・！」

雅人は自身にそう言い聞かせる。そして・・・教室の扉から・・・うつすらとライダーが見えた。

「・・・。」

息を押し殺し、雅人は様子を見る・・・。ライダーは一旦、教室の前で止まり・・・しばらくすると・・・何処かへと行った。

「・・・ハア・・・気づいてないようだ・・・。」

雅人は溜息を吐いてると・・・

「いえ・・・気づいてないふりをしたままでです。」

「!?!」

上を向くと・・・そこにいたのは・・・さきほど廊下にいたはずのライダーだった。

「な・・・何で!?!」

「フフ・・・別に知らなくてもよいではありませんか。どうぞせ・・・死ぬのですから。」

ライダーはそう言い、天井から降りる。

「く・・・!」

雅人はほうきを持って構える。

「そんな木の棒を使って、私に戦いを挑もうと・・・?」

「そ・・・そうだ・・・!」

「・・・フフ・・・」

サーヴァントである自分に挑もうとする雅人に・・・ライダーは笑う。

「何がおかしい・・・!?!」

「いえ・・・あまりにも可愛過ぎまして・・・」

「どこがだよ・・・!」

「フフ・・・そういうところがです。さて・・・サーヴァントを従えてない貴方には・・・苦しませずに・・・楽にあの世に逝かせてあげます。」

「逝きたくない・・・!」

両者は構える。そして・

「ハッ！」

「くっ!!」

同時に動いた。ライダーは釘を放ち、それを雅人は避け、ライダーめがけてほうきを振るう。

「フ・・・」

それをライダーは軽やかに避ける。

「ハッ！ハアッ!!」

雅人がいくら振り回しても・・・ライダーはそれを難無く避ける。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「もうお疲れのようですね。諦めたらどうですか？」

「ハア・・・諦めない・・・逃げたりしたら殺されるだけだし・・・」

「賢い方ですね。」

「こつこつ展開は見たことがあるんでね・・・。」

と雅人は言いながら、またもやほうきを振り回す。

「……ではそろそろ……諦めさせますか……」

ライダーはそう呟きながら避け……雅人の腹に蹴りを一発かました。

「があっ!!!」

雅人は吹っ飛び、机にぶつかって行く。

「フッフ……」

ライダーは笑いながら、雅人に近づいてゆく。

「く……!」

雅人は放棄をライダーめがけて振るが……

バキンッ!

ライダーの釘がほうきに命中し……ほうきはバラバラになる。

「な……!?!」

「これで武器はなくなりました……。諦めた方が良かった……?」

「うう……) どうすればいいんだよ……!」

雅人はふと……自信の左手にある令呪を見る。

「(コレを使えば、セイバーオルタを呼び出せる……けど……使

雅人は体を起こして逃げようとするが・

「ハッ！」

ライダーが釘についている長い鎖で雅人を捕らえた。

「あっ！」

雅人は倒れてしまう。

「もう逃げる事はできません……。鬼ごっこも……。これまでです。」

「く……。！」

ライダーはゆっくりと雅人に近づき……。釘を構える。

「（し……。死ぬのか……。！）」

雅人は死の恐怖を感じていると……

「……。殺し方を変えましょう……。」

ライダーは釘を降ろして……。腰を下ろす。

「貴方から……。溢れんばかりの魔力を感じます……。ソレを一滴も残さず……。吸い取ってあげます……。無論……。生命力も一緒に……。」

ライダーはそう言い……。顔を近づける。

「(え・・・!? 何しようとしてんの!? 何、顔を近づけてんの!?)」

雅人は動揺していると・・・ライダーの唇が・・・雅人の唇に触れかける。

「(ま・・・まさか・・・!)」

雅人はライダーがどうやって魔力を吸い取るうとするのか・・・わかった。

「心配はございません・・・。苦しみはなく・・・ただ・・・快樂だけが・・・感じ取れますから・・・」

そう言い・・・ライダーは唇を重ねようとした・・・その時・・・!

バキユンツ!

という音が聞こえた時・・・ライダーに向かって黒い弾丸が迫ってきた。

「ふ・・・!」

ライダーはジャンプし、それを避ける。

「雅人! 大丈夫っ!?!」

という声がした・・・。雅人は声がした方に顔を向けると・・・そこにいたのは・・・凜と士郎だった。

「ハッ!!」

凜はライダーに向かってガンドを何発も放つ。

「フッ!」

ライダーはソレを避けながら・・・その場から離脱した。

「ふう・・・怪我はない?」

「あ・・・ああ・・・。というか・・・二人とも・・・何処にいたんだよ・・・!」

「悪い。屋上にいてな。探したんだけど・・・見つけれなくて・・・」

士郎は雅人を縛っている鎖をはずそうとする。

「近くで音が聞こえたから、なんとか探せたわ・・・。あと衛宮君、どきなさい。」

凜に言われ、士郎は離れると・・・

「ハッ!」

凜はガンドを撃って、鎖の部分をちぎる。

「あゝ・・・死ぬところだった・・・。」

雅人は脱力する。

「しかし・・・お前は何で此处にいたんだ？」

「あ・・・いや、その・・・土郎や凜の学校って一体どうなってんだろうな・・・なんて思ってきたら・・・こんなことに・・・」

雅人は誤魔化した。学校に来た本当の理由は・・・土郎達がライダーに襲われているのではないかと思ったからである。

「全く、とんだ迷惑よ・・・。まあ・・・サーヴァントの存在は確認できたからよしとしましょう。」

「もう帰ろう。いつまたあのサーヴァントが襲ってくるか・・・わからないしな」

土郎の一言に頷き、三人は学校から出る。

「（・・・あの時、土郎と凜が助けに来てくれなければ・・・俺は死んでいた。・・・俺は・・・強くなりたい・・・！）」

雅人はそう思いながら・・・学校を後にした・・・。

「・・・・・・・・」

ソレを見ている者がいた。ライダーだった。

「（あの赤い髪の男の子と・・・女の子はまた来るでしょう・・・。彼は・・・来ないと思いますね・・・はあ・・・ごちそうを・・・逃してしまいました。）」

ライダーは思ったのであった。

第七話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅人「完膚無きにされてしまった・・・」

そう簡単に・・・力を発揮させたくないし、徐々に強くさせてやるから・・・。

雅人「そうかよお・・・」

ふう・・・では次回をお楽しみに・・・！

第八話

衛宮家 門前

「ハア……疲れたあ……」

衛宮家の前で、雅人は溜息を吐いた。

「そうねえ、サーヴァントから逃げていたらそりゃそうなるでしょうね。」

「でもさ、死なずに済んだんだから良かったじゃないか？」

「馬鹿ね、衛宮君。私達が駆け付けてこなかったら今頃、如月君は此処にはいないわよ？」

凜は辛口を発する。

「とりあえず、中に入ろう。」

「ああ。そうしよう。」

三人は衛宮家に入っていく、扉を開けた瞬間……

「随分と遅い帰りだったな……。」

そう、辺りを凍りつかせるような声が聞こえ……三人はその場で硬直する。

「さて……今まで何処で油を売ってたのか……聞かせてもらおうか……?」

「シロウ……こんなに遅くまで何処にいたのですか?」

目の前にいたのは……セイバーオルタとセイバーだった。

「なるほど……では、学校という所にマスターがもう一人いると……?」

学校で起きた出来事を聞いたセイバーは聞く。セイバーオルタは無言であった。

「ええ。サーヴァントが学校にいたんだから、そうでしょう。それに結界を張ってるから。」

「結界ですか。厄介なのが・・・」

凜から聞いたセイバーは考えるしぐさをする。

「一応、私と衛宮君でその結界の発動を遅らせたけどね。」

「それが終わった時に・・・な。」

「あ・・・あはは・・・。」

凜と士郎は雅人を見ながら言い、雅人は苦笑いをする。

「では、そのマスターはまだ、確認できてないと・・・？」

「ああ。俺と遠坂が駆け付けてきたときには、サーヴァントだけだったし・・・。」

「ではマサト、貴方の方は？」

「全然・・・。こっちは逃げるのに必死だったし。」

「そうですか・・・。」

セイバーは瞳を閉じながらそう言う。

「（まあ・・・ライダーのマスターが慎二なんだが・・・どうもまた、言えないな・・・）」

雅人は思いながら・・・ライダーのマスターは慎二と言おうとするが、また声がなくなっていた。

「（俺が、サーヴァントやそのマスターの事を言おうとすれば・・・必ずこうなるな・・・。一体どうして?）」

雅人は考えていると・・・

「士郎~~~~! 御飯食べに来たよ~~~~」

「お邪魔します、先輩。」

と玄関から声が聞こえた。

「やば! 藤姉と桜だっ!」

「藤村先生と桜が・・・!? 何で此处に!？」

「兎も角・・・雅人たちは何処かに隠れてくれッ!」

どうやら二人には聖杯戦争と雅人、セイバー、セイバーオルタの三人の事は話してないらしい。

「なぜ隠れる必要が?」

「悪いセイバー、二人がセイバー達を見たら驚くから・・・。」

「・・・では、部屋で待機してます。何かあったら呼んでください。」

セイバーは士郎にそう言い、部屋に戻って行った。

「雅人達も!」

「ああ、わかった。行こう、セイバーオルタ。」

「……フン……。」

セイバーオルタは何やら不機嫌そうに雅人と一緒に部屋に戻って行った。

雅人とセイバーオルタの部屋

「……………」

セイバーオルタはずっと無言のままであった。

「あのさぁ…何ですつと黙ったままなの……？」

雅人は恐る恐る聞いてみる。

「……おい」

「ん？」

「話がある。そこに座れ。」

とセイバーオルタに言われ、雅人はセイバーオルタの前に座った。

「話って？」

「……お前はサーヴァントと戦ったな……。」

「ああ。」

「その時、なぜ私を呼ばなかった……？」

「え……？」

「なぜ私を呼ばなかったのだと聞いているのだ。なぜだ……？」

「いや……なぜって言われても……。」

セイバーオルタの問いに雅人はおどおどしていると・

「令呪があれば・私を呼び出せたはずだ・・・なのに、なぜしなかつた？」

「お・・俺は・・」

「大方、あの赤髪と魔術師の女と合流すれば・・なんとかなると思つたからか・・？」

「・・・・ああ。」

「・・・ホントに・・・お前は馬鹿だ・・・」

「え・・？」

セイバーオルタはそう呟くと同時に雅人の首を掴み、壁にぶつける。

「痛っ!？」

「お前は馬鹿で・甘過ぎるのだ!もし、あいつらに会えなかったらどうするつもりだったんだ!? 闘ったとしても、人間ではサーヴアントには勝てない! 危うく死ぬところだったんだぞっ!？」

セイバーオルタは雅人に向かって怒鳴る。

「そういう甘い考えを持っていれば・・お前はいつか自信を破滅へと導かせるぞ・・!」

セイバーオルタはそう言い、雅人を放す。

「ケホケホッ！だ……だったら強くなればいいだけじゃないかっ
！」

「何？」

「俺が強くなってちゃんとした魔術師になれば……サーヴァントに
だって勝てるはず……！」

雅人はそう言った。

「はぁ……じゃあ、どう強くなるつもりだ……？あの女や赤髪か
ら魔術でも習うか？」

「まぁ……それもある。それに……セイバーオルタに習いたい事か
ある……！」

「私に……？」

「あ……ああ。セイバーオルタに剣の使い方を……な……。」

と雅人は横を向きながらそう言う。

「……はぁ。どうせ、何を言おうがやめんのだろう？」

「……ああ。」

「……仕方がない。私のマスターのためだ。きつちりと教えてや
る。」

とセイバーオルタは凜とした表情でそう言う。

「あの・・・お手柔らかに・・・」

「徹底的にやるから覚悟しろ。」

「・・・はい・・・。」

雅人は加減してほしいと願うが・・・諦めるしかなかった。その時・・・

「雅人、セイバーオルタ！ちょっと良いか？」

「士郎・・・。」

扉が開かれ、士郎が入ってきた。その後ろにはセイバーがいる。

「な・・・なんか元気なさそうだな・・・。まあいいや来てみてくれ・・・。」

「何？」

士郎に連れられ、二人は茶の間に来た。

「あゝ、この子達ね。記憶喪失の子とセイバーちゃんの妹は？」

目の前に一人の女性がいた。

「藤ねえ、二人が雅人と・・・セイバーオルタ。」

士郎は二人を紹介するように言う。この女性が藤村 大河だ。

「ほえ〜・・・セイバーちゃんとは顔が瓜二つね。肌色や髪の色が違うけど・・・」

「・・・なぜ私がコイツの妹なのだ・・・！赤髪・・・！」

とセイバーオルタは不満げに言う。

「頼む。藤ねえにそう言っちゃったんだから。」

「・・・フンッ！！」

セイバーオルタは横を向く。

「んで、君は・・・何処まで覚えてる？」

「ああ、名前と・・・後は物心？」

最後はいまいちな発言だった。

「私は藤村 大河。そこにいる太郎のお姉さんをやってて、太郎の学校の先生もやってるの、よろしくね」

「よろしくお願いします。」

「桜ちゃんも挨拶したら？」

と藤村は凜と一緒にいる紫髪の女の子に言う。

「あ・・・はい・・・私は間桐 桜です。よろしくお願いします。」

と少女・・・間桐 桜は丁寧にお辞儀する。

「あ・・・どうも・・・」

雅人もまたお辞儀した。

「で、藤ねえ・・・この三人を此処にしばらくいさせてほしいんだ・・・」

「わかってるわよ。でもね・・・此処にといさせるには、条件があるわ・・・」

「条件？」

雅人は聞く。

「三人のうちの一人が私と闘ってもらいます。勝つたら、ここにいさせてあげます！負けたら、他を当てるようにっ！」

「滅茶苦茶な事言っなよ、藤ねえ！」

「士郎は黙ってなさい!!」

「ああ・・・どうしよう・・・。」

雅人は藤村の実力を知っている。自分は剣道はした事がなく、必ず負ける。こうなれば、セイバーかセイバーオルタに頼むしかない。

「面白い・・・やってやる。」

セイバーオルタが一步前に出てそう言った。

「セイバーオルタ!？」

「なぜ貴女が・・・!？」

「言つたろう。おもしろいとな・・・。それに、ようはコイツを完膚無きにまでさせると言つのだらう?、ならやってみる。」

「むちゃくちゃだ~~~~!!」

雅人は頭を抱える。

「へえ・・・面白いわねえ・・・ならついてきなさいっ!勝負は道場でよっ!!」

「望むところだ・・・!」

と二人はオーラを出しながら道場に向かう。

「何か・・・大変なことになってきた気がするよ~~~~~~~~!!」

雅人の叫びを聞いている者は誰もいなかった・・・。

第九話

道場

道場に來たセイバーオルタと藤村は互いに睨みあう。ソレを横で見ている雅人達は・・・

「どうするんだよ、雅人。セイバーオルタ、加減してくれんのか？」

「さ・・・さあ・・・わからん。」

士郎の質問に雅人は苦笑いをするしかなかった。

「・・・藤ねえの身が危なくなったらよろしくな、セイバー・・・。」

「わかりました、シロウ。」

とんやかんだ言っていると・・・

「さてと・・・始めましょうか？」

「望むところだ・・・」

セイバーオルタと藤村が構える。ふと・・・セイバーオルタは構えを解いた。

「おい・・・なぜおまえが武器を持っていて・・・私は持っていない？」

そう、藤村の手には竹刀が持っていたのだ。対するセイバーオルタは何も持っていない。

「不満なら・・・私から奪いなさいイイイッ！！！」

藤村はそんなのお構いなしにセイバーオルタに突っ込んでいった。

「フン・・・なら言う通りに、奪ってやるぞ。」

「ハアアアアアッ！！！」

セイバーオルタが呟いている内に藤村がすぐ目の前まで来た・・・そして・・・

キインッ！

「・・・あ・・・あれ・・・？」

藤村は何やら困惑している。それもそのはず・・・先ほど手に持っていた竹刀がなくなっていたのだ。

「貴様の剣ならある。」

「っ！」

藤村が振り返ると、そこには・・・藤村の竹刀を持っていたセイバーオルタがいた。

「ハッホッ」

とその場にいた全員はホッとため息をつく。

「貴様は勝てない・・・諦めるんだな。」

「・・・フフ・・・」

負ける状況で藤村は不敵な笑みを浮かべる。

「・・・何がおかしいんだ？」

「・・・それで勝ったと思うなよオオツ!!」

藤村は背中からもう一本、竹刀を取り出してセイバーオルタに接近する。

「ふ・・・藤ねえ・・・背中に隠し持っていたのか・・・？」

「よく隠せたな・・・」

士郎と雅人は驚いた表情を浮かべる。

「フン・・・」

セイバーオルタが構えた瞬間・・・

ポンッ!

と竹刀から煙がでてきて・・・竹刀の先から花がでていた。

「もらったアアアアっ!!」

藤村は一気に竹刀を振ったが・・・

キンッ!

またもや藤村の手に、竹刀がなくなっていた。

「え・・・!?!」

困惑しながら、ふと振り返ると・・・そこにはまたしても竹刀を奪っていたセイバーオルタの姿があった。

「いい加減、負けを認めろ・・・。何度やったところで・・・貴様に勝ち目はない・・・。」

さきほどの竹刀を捨て、セイバーオルタは藤村の頭を竹刀で叩く。

「・・・く・・・くうう・・・負けたあ・・・」

藤村は脱力しながら言った。

「はあ・・・どうやら危ない事にはならなかったな。」

「そうですね。」

「ふう・・・まあ、良かった・・・かな・・・。」

全員はまたしてもため息をついた・・・。

数時間後

「ええっ！？本気かよ・・・藤ねえ！」

「当り前でしょう！男女二人つきりにはさせません。よって、私も泊ります！」

あの後、藤村は此処に泊ると言いだしてきたのだ。すでに浴衣に着替えている。ついでに桜とセイバー・・・そしてセイバーオルタもだ。

「困ります。私はシロウを守護していなければ・・・」

「ダメです！」

「・・・はぁ・・・セイバー、頼む。ここは我慢してくれ。あの様子じや流石に許してくれなさそうだ。」

「はぁ・・・」

「私は従わん。コイツと一緒に部屋にしろ・・・!」

セイバーは認めたようだが、セイバーオルタは認めない様子。雅人を指差しながらそう言う。

「ダメなものは、ダメですうツ!!」

対する藤村は認めない。

「あ・・・あのさぁ・・・何で俺と同室・・・?」

「前も言つたろう、貴様が他の奴に殺されては私が困るとな・・・!」
セイバーオルタは雅人に近づきながらそう言う。途中、胸元が見えてしまう。

「いくら言つても、ダメなものダメなんだからねっ!!」

「・・・敗者がずいぶんと偉そうにしているな・・・。」

「へ・・・?」

「敗者は敗者らしく・・・黙っている・・・!!」

と鋭い目つきで藤村を睨み・・・藤村はそれに恐怖した。

「く・・・！ダメなものは・・・ダメです・・・！」

だが、何とか気を振りしぼって耐えた。

「藤村さんもああ言っているし・・・従ったほうがいいよ？」

「・・・チツ、仕方がない・・・！」

セイバーオルタはようやく認めたようだ。

「それじゃ、お休みー。」

「お休みなさい。」

士郎と雅人は自分の部屋に戻って行った。

「さてと、私達も寝ましょう。電気、消すよ。」

藤村はそう言い、部屋の電気を消した・・・。数十分後・・・皆、熟
睡する。

「・・・・・・・・」

だが一人だけ、起きている人がいた。静かに体を起こし、気づかれないように静かにその場を去った。

雅人の部屋

モゾ・・モゾ・・

雅人が眠っている時・・何か物音が聞こえる。

「ううん・・なんだ・・?」

雅人は寝返りをして、手で探ると・・

ムニユムニユ・・

何やら柔らかいものを掴んだ。

「(ムニユ・・・？あれ？俺、クッションとか布団の中に入れていたっけ？)」

雅人は疑問に思いながら目を開けると・・・そこにいたのは・・・

「ふう・・・あ・・・」

妖艶な声を上げるセイバーオルタの姿だった。

「うなっ！？な・・・なにしてんのっ！！？／／／」

セイバーオルタを見た瞬間、一気に顔を真っ赤にして布団から飛び出る。

「ハア・・・傍にいた方が、殺されないで済むからな・・・。」

「だからって・・・何で俺の布団の中に！？／／／」

「私の布団が敷いてなかったからな。だからお前の布団を使わせてもらっているだけだ。」

「じゃ・・・じゃあ布団敷くから、セイバーオルタはそっちを使ってくれ・・・／／／」

「待て」

雅人が布団を敷きに行こうとしたが、セイバーオルタが止める。そして、とんでもない事を言った。

「一緒に寝る・・・。」

「なっ！何でそんな・・・！！？／／／」

「いちいち布団をもう一つ敷くのもめんどくさいだろう・・・。私が一緒に寝ると言ったのだから、一緒に寝る。」

「い・・・いや・・・いってば・・・。」

「・・・もういい。無理やりだ。」

「え？うわあっ！？」

セイバーオルタがそう言った瞬間、素早く雅人を捕まえ、布団の中に入れる。そして逃がさないようにガッチリと捕まえる。

「ぐくううう・・・力強い・・・。」

「諦める。人間の力ではサーヴァントの腕力から逃げられない。」
必死に離れようとしている雅人だったが、セイバーオルタの一言により断念した。

「それでは私はもう寝る。お前も寝る。あ、付けたしするが私が眠っている間に離れようとしても無駄だからな。」

そう言い、セイバーオルタは眠りについた。雅人は試しに離れようとするが・・・無駄だった。

「ハア・・・無理か・・・。」

雅人はため息をつきながらふとセイバーオルタの顔を見る。

「・・・セイバーオルタの寝顔って・・・初めて見るな・・・」

そう呟きながら雅人はセイバーオルタの寝顔を見つめる。美しく、そして少々幼さが残っている顔に、雅人は見惚れる。

そんな時・・・

ムニユウ・・・

「っ!!!!／／／」

セイバーオルタが抱く力を強めて胸を押しつけてきた。

「（せ・・・セイバーオルタの胸が接触してるっ!!や・・・柔らかい・・・ハッ!ダメだ、ダメだ!!!煩惱退散だっ!!!!つか・・・もう寝よう。）」

雅人はそう思いながら眠りに着いた・・・。

翌日

「すう・・・すう・・・」

雅人が眠っている・・・

「起きろオオオオオオツ！！！！」

「うわああああっ！！？」

耳元で叫ばれて、雅人は布団から跳び起きる。

「ようやく起きたか。さあ、特訓だ。さっさと着替えて、道場に来い。」

そんな事を気にせず、私服に着替えているセイバーオルタが言って、その場を後にした。

雅人は時計を見てみると・・・五時三十分だった。

「・・・ハア・・・これから毎日早起きか・・・」

雅人はため息をつきながら着替え、道場に向かうのであった。

第十話（前書き）

更新を遅れて申し訳ございません。
それではスタート。

第十話

バチンッ！バチンッ！！

いつもの朝、ぶつかり合う音が道場に響き渡る。

「オオオオオオオッ！！」

雅人がセイバーオルタに向かって突っ込み、上段から竹刀を振り落とすが・・・

「・・・フン！」

「がっ！」

セイバーオルタがソレを受け流し、雅人の頭に竹刀を叩きこみ、雅人はソレを受けて頭を抱える。

「上段から斬ろうとすれば、今みたいに隙ができる。後の事を考えてやれ。」

「くっ！そりゃあっ！！！！」

セイバーオルタにそう言われながら、雅人は竹刀を振るう。

「ハッ！」

「ぐああっ！！」

が・・・セイバーオルタに腹を竹刀で叩かれ、吹っ飛ばされる。

「クウウ・・・ゲホツ、ゲホツ！」

「いちいち、頭を狙おうとするな。今のように、腹に叩きこまれたらおしまいだ。手を打って武器を奪うのも一つの戦法だぞ？ま、それができればの話だが。」

セイバーオルタは雅人を見下しながらそう言う。

「ま・・・だ・・・まだアアツ!!!」

雅人は立ち上がり、セイバーオルタに突っ込んだ。

数十分後

「……さつきから道場から物音が聞こえると思ったら……なんだこりゃあつ!？」

その場に来た士郎とセイバーは驚いた表情をする……。それは……

「ん？赤髪か……何か用か？」

目の前にセイバーオルタがいて、その隣にボロボロになって倒れている雅人の姿だった。

「雅人！しっかりしろ！」

「お……おう……」

士郎の呼びかけに答える雅人だが、疲れて動けそうにない。

「貴女は……自分のマスターをここまでボロボロにさせるとは……」

「フン。単にコイツが物覚えが悪いせいだ。私は悪くない。」

「貴女という人は……」

セイバーオルタの言葉にセイバーは呆れる。そんな時……

「あ、そつだ。おい、赤髪。」

「なんだよ？てか、俺は赤髪じゃなくて士郎だ！」

「赤髪でよいだろう。頼みがある。コイツに魔術を教えてやれ。」

「何で？」

「コイツも一応、魔力を持っている。だから、魔術を覚えさせ、魔術師にしてやれ。」

「はぁ……てゆうか、俺は強化の魔術しかできないぞ？」

「そつか……役立たずだな。」

「……おまえなあ……！」

セイバーオルタの言い方に士郎はムツとする。

「なら、私が教えてあげましょうか？」

とそこに、凜が現れた。

「私なら、雅人と士郎に魔術を教えてあげられるわ。」

「ほう……貴様に出来るのか？」

「私はこの二人よりも立派な魔術師よ。教えることだってできるわ。」

「なら貴様に任せよう。では、休むとしようか。」

セイバーオルタは竹刀をしまつて正座した。

「というか・・・お前ら、何時からやっていたんだ？」

「早朝からだ。」

「早朝つて・・・何時にだよ。」

「う・・・五時半からだ・・・」

「そんな朝早くからかよ・・・！？ずっと！？」

「きつちり休ませているぞ・・・だいたい三分ぐらいだ。」

「三分かよ。あ、そうだ。もう朝食ができているんだ。藤ねえと桜が待っているんだ。」

「よ・・・ようやく飯に・・・」

「お前は休んだ方がいいぞ？」

士郎はフラフラの雅人を連れて行った。

数時間後

「ハアッ！」

「フン。」

しばらくして、雅人とセイバーオルタは竹刀をもってぶつかり合った。・・といつても、セイバーオルタは無傷のまま。雅人はボロボロの状態だ。

「ハア・・・ハア・・。」

「ふむ。昼はこれぐらいにしよう。続きは夜だ。」

「夜もかよ・・。」

「あたり前だ。徹底的にやるのだからな・・・。」

セイバーオルタは竹刀をしまつて、道場を後にする。雅人は横になつた。

「これを毎日、続けていると・・・体がもちそうにないかも・・・」

と、そんな事を言っていると・・・セイバーオルタが戻ってきた。

「おい、ハンバーガーがなかったぞ。作れ。」

「え！？朝、食べたでしょう！ハンバーガーばかりじゃ、体に毒だぞ？」

「私はハンバーガーが食べたいのだ。作れ。」

「だから、体に毒だつて！」

「は・や・く・し・ろ・・・！」

「了解しました！！！」

セイバーオルタの殺気に雅人は恐怖しながら、道場を出る。

「といつても・・・俺はハンバーガーの作り方、わからないぞ・・・。士郎に聞きたくても学校だし・・・。それに・・・」

雅人は呟きながら、冷蔵庫の中を見てみると・・・ほとんど、空の状態だつた。

「材料がないんじゃない、どうしようもない……」

「どうかしましたか、マサト？」

そこへ、セイバーが現れた。

「いやさぁ……食材がほとんどなくて……」

「そういえば、シロウが行く前に、帰りに食材を買って行くと言っていました。」

「そうかぁ。」

「私は我慢はできる方ですが……彼女は……」

と言っていると……

「おい、まだか？早くしてくれ。」

セイバーオルタがイライラした表情でこちらを見ていた。

「ああ……どうしよう……。ハッ！そうだ、土郎にお金を少しもらったんだ。ソレを使えば。」

「……では、私が彼女の相手をするので、貴方はそのすきに食材を。」

「助かるよ。じゃあ、行ってきますすー！」

商店街

「ふう〜・食材はこれだけで良いかな？」

雅人は手に荷物を持ちながらつぶやく。

「・・・こちらへんにハンバーガーショップでもないかなあ・・・はあ、困るぜ。」

雅人は商店街を歩いていると・・・ある店に目がいく・・・それは・・・

「本屋だ・・・丁度いい！料理本でも買って行こう！」

雅人は本屋に行つて、料理本を探す・・・と・・・

「ん？」

一人の女性を見つける。

「あの人って……もしかして……」

雅人はジッと女性を見る。女性の容姿は長い紫色の髪を一つにまとめ、メガネをかけており、黒い服を着ていた。遠くからみても、美人だということがわかる。

その女性を雅人は知っていた。

「……ライダーじゃない……？てか……慎二のそばにいるんじゃないのか？」

と呟いていると……

「ん？」

女性が雅人の方に顔を向ける。

「（やばっ！顔を合わせるなッ！！そしてこの場から離れようっ！！！！）」

雅人はそそくさとその場を後にしようとした……その時……

「待ちなさい。」

背後から声が聞こえたと同時にガシッと肩を掴まれてしまった。

「っ！」

振り向くと、そこにいたのは……先ほどの女性だった。

「貴方・・・私を見て逃げようと思いましたね・・・。」

「は・・・はて・・・なんのことやら・・・。」

「知らないふりをしていても無駄です・・・。それに・・・私達はすでに顔を合わせていますから・・・。」

「・・・やっぱり・・・ライダー・・・だよね・・・？」

雅人は恐る恐る聞くと・・・

「そうです。」

女性・・・ライダーがそう言った。

「・・・俺を殺すつもり・・・？」

「本当なら、そうしたいのですが・・・人がいますのでやりません。」

「・・・はあ・・・。」

ライダーの言葉に、溜息を吐く雅人だが・・・気を緩めてはいけない・・・。

「じゃ・・・じゃあ、この手をどかしてもらっても・・・。」

「いいえ・・・。それはできません。」

「何で・・・？」

雅人は警戒しながら聞くと・・・

「・・・少々・・・私と付き合っではくれませんか？」

ライダーはそう言ったのであった。

第十一話（前書き）

遅い投稿、申し訳ございません。

今回は、たぶんですが、雅人とライダーのキャラが崩壊する恐れがあります。

そんでもって短いです。さらにはグダグダです。

それではスタート。

第十一話

「（どうしてこうなったの・・・？）」

現在、雅人はライダーと一緒に商店街を歩いていた。

「（付き合ってくれませんか・・・って言われたけど、一体何で俺と？ 慎二とじゃなくて？）」

そう考え込んでいると・・・

「すみませんね。付き合わせてしまい。」

ライダーが雅人にそう言うてきた。

「あ、いや、いいですよ。大丈夫ですから！（何を大丈夫なんだよ・俺の馬鹿・・・）」

帰りが遅くなると、セイバーオルタが鬼神、あるいは死神となって俺を殺すかもしれないのに・・・。

鬼神か死神となって襲い掛かってくるセイバーオルタを想像したのだろうか、雅人は大量に汗をかき、肩を震わせる。

「どうしました？ そんなに汗をかいて・・・」

「あ、な、なんでもありませんよ！ 大丈夫です！！」

「・・・やっぱり、敵である私が傍にいるから・・・ですか？」

ライダーの表情に影ができた。雅人はソレを見て、しまったと思った。

「無理もないです。貴方の敵であるある私が、貴方とこうしてられるはずがない。」

「いや、そうじゃなくてっ!」

「だったら、なんです?他に理由があるのですか?」

ライダーは問いに雅人は・

「理由は・・・まあ、こつちの問題というか、決して、ライダーのせいではない!むしろ・・・」

雅人はと途中で言葉が続かなくなってしまったのか、黙ってしまう。

「むしろ・・・なんですか?」

ライダーは静かに問い、その答えに雅人は・

「むしろ・・・その、嬉しい・・・かな。」

そう言ったのであった。ライダーはそれを聞いて少々驚いた表情を浮かべる。

「嬉しい?私といるのが嬉しいと?」

「まあ、はい。(だって本物のライダーと街中で一緒に歩いている。

怖かったけど、良い思い出に残りそうなことだ。士郎や凜、セイバー……そしてセイバーオルタとも一緒に街中をゆったり歩ければなあ。」

などと考えていた。

「……嬉しい……ですか。」

彼女にとっては嬉しいと言われたのは何十年ぶりだろうか……。ライダーの心はその言葉に振るえそうだった。

「こんな私について嬉しいですか。物好きな方ですね、貴方は。」

「うう……。」

「まあ、いいでしょう。気を取り直して、行きましょう。」

「そういえば……何処に行くんですか？」

さつきから歩いてばかり。店に寄ったりしなかったのだ。

「私はまだこの町を良く知らないの、貴方に教えてもらおうかと。」

「あ、そうだったんだ……。まあ、知ってる範囲なら……。」

そうして、雅人はライダーに冬木の事を教えて、いろいろな店に寄った。

「どうでした？少しは冬木の事、わかりました？」

「ええ。少しですが。」

そう会話をしていると・・・

「ファイトッ！ファイトッ！」

どこかの高校の野球部集団が走ってきて、ドンッとぶつかってしまった。

「おわっ！」

雅人は倒れそうになると・・・

ムニユウ・・・

と、何かを掴んだようだ。目を開けてみると、目の前に紫色の髪があった。

「何をしているのですか？」

そう、雅人はライダーの胸を掴んでしまったのだ。

「（なに、この展開————っ！！！！？）／／／」

雅人は顔を真っ赤にして心中で叫んだ。

「人の胸を揉むとは・・・許しがたい事ですよ？」

「す、すみませんっ！！！！」

雅人は勢いよくライダーから離れ、思い切り息を吸った。

「そ、その、わざとではなく・・・」

「……………」

「すみません。ホントにすみません！」

「……………いいでしょう。ですが、次はありませんよ？」

「……………はい。」

しばらくの間、沈黙した。

「（なんて言えばいいんだ・・・！？言葉が思いつかない！！！！）」

「・・・以外と、貴方は初心ですね。」

雅人が考えていると、ライダーが沈黙を破った。

「え？」

「私の胸を揉んで、あんなに顔を赤くするのですから、相当でしょう。」

「ええ〜・・・。」

雅人の仕草にライダーは口元を緩ませると同時に、ため息を吐いた。

「ハア・・・貴方のような人が、私のマスターであつたら・・・（ボソッ）」

「え？なんか言いました？」

「なんでもありません。」

そして時間が過ぎて・・・夜となった・・・。

「ここでお別れです。付き合っていたいただきありがとうございます。」

ライダーはそう言い去って行こうとすると一旦、足を止めた。

「言い忘れましたが、次会う時は敵同士です。その時は、貴方の命をいただきます。」

「っ！……死にたくありません!!」

「……ですから、次に私と会うまでは、他のマスターやサーヴァントに殺されないでくださいね?では。」

ライダーは妖艶な笑みをしながら、その場を去って行った。

「……殺されるのは嫌だぁ……。にしても、何か忘れているような……。」

雅人はそう呟きながら衛宮家に着いて扉を開けた……。

「随分と遅かったなあ・・・」

そこには背後に黒いオーラを出し、鬼の形相で雅人をみつめるセイバールタがいた。

そのセイバールタの後ろには手を合わせてごめんとやっている土郎と申し訳ないと頭を下げているセイバーの姿があった。

「さてと、私をここまで待たせた貴様には・・・どのような処罰を与えようか・・・」

地を這うように言うセイバールタに恐怖し、雅人は逃げようとしたものの、セイバールタに肩を掴まれ、そのまま道場に連れ去られた。

そして次の日、土郎が道場に行くと、そこには・・・魂が抜けて、ボロボロになって倒れている雅人の姿と・・・ソレを上から見ているセイバーオルタの姿があったとな・・・。

第十一話（後書き）

更新を遅らせてしまい申し訳ございません。
次から早めに更新するよう心がけます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8839o/>

やってきた場所はFateの世界！？

2011年9月12日12時35分発行